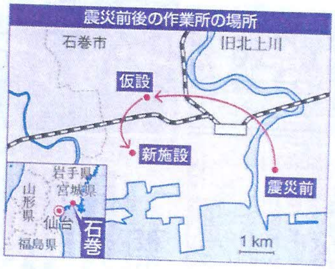
（第3種郵便物認可）

東日本大震災から5年

被災の障害者作業所 新施設に移転

織りなす 幸せの色



宮城・石巻

パタンパタン。シューッー。楽しそうな会話に、織り機の音が交じります。色とりどりのさをりの糸のように個性豊かな障害者らが「さをり」を織る。ここは、宮城県石巻市にある「障害者地域活動センター　こころ・さをり」です。東日本大震災から間もなく5年になる今月末、仮設団地の一角から新しい建物に移り、活動の幅を広げようとしています。

（岩井亜紀　写真も）

新しい施設ができて歓声を上げる「こころ・さをり」の人たち＝宮城県石巻市

「きれ～い！　明るいね」「食堂はあるのかな?」「広くて迷子になりそう」―。完成間近の建物に初めて入った仲間たちは歓声を上げました。

玄関を入ると開けたスペースが。さをりの販売をするなど地域の人たちにも開放する予定です。新しい作業所の名は「織音」です。

さをり織り　1913年、大阪・堺に生まれた城みさをさんが広めた手織り。「さをり」の由来は、「差を織る」。個性を尊重する「さをり」の考えは障害者や高齢者の施設などに広く受け入れられています。城さんが提唱する「さをり四つの願い」は、▽機械と人間の違いを考えよう▽キラキラと輝く目を持とう▽思い切って冒険しよう▽グループのみんなで学ぼう―です。

新たな活動も

「織音で新たな活動も始められたら」と施設長の熊井睦子さん（58）は力を込めます。

「緊張もするけど、楽しみにしています」と目を輝かせるのは、「こころ・さをり」で働いて2年の19歳女性。テレビで見る海外の景色やキラキラ光るイルミネーションが好きで、これらをイメージしてさをりを織るといいます。

感じるまま織るのがさをりです。短い糸を使って数々の幅のストラップをつくる仲間もいます。捨てるところがないのも特徴です。

「織る前に色合いはだいたい決めますが、最終的には織りながら色を変えます。作品が完成するとイメージと違ったり、想像以上に良くできたり」

さをりの魅力を語る阿部尚子さん（43）。25歳で受けた脳幹部海綿状血管腫の手術後、車いす利用になりました。

震災までは、旧北上川のそばのビル2階にあった「こころ・さをり」。ビル上階に避難し、犠牲者は一人も出なかったものの建物は半壊し、5カ月後に仮設団地に移りました。

当時、慣れない場所での再開に戸惑う仲間も。阿部愛さん（26）もそうした一人でした。いまは妹の誕生日ギフトにと「ポップ・ラブリー系のデザイン」で服を織っています。

「いまは少し心が取り戻せたかな。新しいところではまた、ちょっと雰囲気が違うのかもしれないけど、さをりを続けたい」

オンリーワン

愛さんの父親（58）は「娘の作品はどれもオンリーワンだよね。そのときの感情と感性でどれも違う風合いになる」と目を細めます。

仮設移転後に「こころ・さをり」が力を入れたのは、作品販売です。仲間が織るカラフルな布を小銭入れやポーチ、キーホルダーなどに加工。各地からのまとまった注文や、リュックサックなど個別の注文にも対応します。

熊井さんは「織音では、新たな仕事も探し、さをり以外のことにも挑戦しながら、みんなが地域で暮らす力をつけていきたい」と話します。

〝どんな作品になる？想像以上かも〟

「調子はどう?」などと話しかける熊井さん（右）

「キラキラしたものが好き」

さをり織りを使って作られた小物類

さをりの糸と織り

テレビ・ラジオ番組表は8・9面